

ロジャー・ベーコンにおける宗教と科学

降 旗 芳 彦

1

13世紀の中葉を生き、その時代としてはきわめて独特な思想を展開したロジャー・ベーコンは、主著 *Opus Majus* (大著作) の第7部において、世界の主要な宗教の比較にもとづく独自の宗教観を語っている。

ロジャー・ベーコンは1214年頃イギリスに生まれ、1292年頃没したとされるフランシスコ会の修道士で、トマス・アクィナス、アルベルトゥス・マグヌス、ボナVENTゥラといったスコラ学の最盛期を代表する思想家たちとほぼ同時代の人物である。ベーコンは、創設後間もないオックスフォード大学で教育を受け、パリ大学で教鞭を取り、フランシスコ会に入会し、オックスフォードとパリの間を行き来して過ごしたと考えられる。

かねてからベーコンと親交のあった枢機卿が教皇クレメンス4世となったのを機に、クレメンス4世からベーコンに対して著書を送るようにとの要請があり、フランシスコ会から何らかの嫌疑をかけられて、著作活動に制約を受けつつも¹、ベーコンが短期間のうちに秘密裏に書き上げて1267年に教皇に献上した著書が、ベーコンの主著とされる *Opus Majus* である。以下に *Opus Majus* の構成を概観しておきたい。

主著 *Opus Majus* は、キリスト教世界における学問の改革を教皇に訴える著作であり、キリスト教世界でこれまであまり重視されてこなかった諸々の学問がキリスト教にとっていかに有用で不可欠なものであるかを説く著作である。*Opus Majus* は7部から成っており、第1部は、われわれを誤謬へと導き、知恵の獲得を妨げる四つの原因について説いているが、第2部から第7部までは、ベーコンがキリスト教にとって有用であると考えた個々の学問の解説に充てられている。

第2部では、哲学が神学にとって欠くべからざるものであることが説かれる。ベーコンが哲学 (*philosophia*) という語を用いるとき意味するのは、ギリシア、ローマ、イスラムの哲学を中心とする異教徒の哲学である。トマス・アクィナスやアルベルトゥス・マグヌスの例を出すまでもなく、

13世紀の思想家にとって、アリストテレスの影響は絶大だったわけだが、ベーコンもまたアリストテレスの哲学をこのうえなく尊重した思想家の一人であり、当時入手できたアリストテレスのあらゆる著作を研究していた熱心なアリストテレス研究者であった。ベーコンが哲学の代表者と見なしたのは、アリストテレスであり、その注釈家・後継者としてのアヴィケンナ、アヴェロエスであった。

第3部では、言語の知識の必要性が説かれる。ここでベーコンが念頭に置いている言語とは、哲学の研究と聖書の研究に必要となるギリシア語、アラビア語、ヘブライ語といった外国語である。当時一般に使用されていた聖書のラテン語テキストがいかにも不完全なものであるか、アリストテレスのラテン語訳がいかにも多くの誤りを含んでいるかという点は、ベーコンが繰り返し強調している点である。聖書研究にせよ哲学研究にせよ、外国語の知識を活用して、原語のテキストを研究すべきだというのが第3部の趣旨である。

第4部では、あらゆる学問の土台としての数学の重要性が説かれる。ベーコンは、この宇宙のあらゆる物体間の作用を説明する自然哲学の理論として、species (形象) の理論を作り上げている。species とは、作用者が周囲の被作用者を自己に同化することによって被作用者のうちに生じる作用者の類似物のことである。ひとたび生じた species は、隣接する部分に次々と新たな species を生じさせ、こうして作用者の同化作用は、遠く離れた被作用者にまで及ぶと考えられている。この同化作用は、万有引力のようにあらゆる物体間に働くものとされる。

ベーコンによれば、われわれが光の伝播と見なすものは、光の species の伝播であり、あらゆる species が光の species と同様に伝播するとされる。作用者から被作用者への同化作用の媒介者たる species が光と同様に伝播すると考えることで、光の諸性質を研究する光学は、ベーコンにとって自然の諸現象を解明する鍵と見なされることになり、光学の研究に幾何学の知識が不可欠であることから、数学の重要性が説かれることになる。

ベーコンは、光学の知識と数学の知識を駆使して、当時最先端の自然学上の諸問題を論じている。たとえば、当時採用されていたユリウス暦の誤差を指摘し、地球が球形で地軸が傾いているという認識にもとづき、極地方や赤道地方での太陽の動きと日照時間を論じたり、日食・月食における太陽と月と地球の位置関係を解説したり、潮の干満と月の関係を説明したりしている。

13世紀には、太陽と月のみならず、それ以外の天体が地上に及ぼす影響もきわめて大きなものと一般的に考えられており、ベーコンの学問観の根底にもこの考えが見られる。ベーコンは、人間の誕生時における天体の配置が、各人の性格を左右するものと考え、地上の出来事は天体の配置と関係があるものと考えていた²。したがって、天体の配置と地上の出来事の間を明らかにすることができれば、未来の天体の配置を計算することで、地上における未来の出来事の予測と対策が可能になると考えていた。ベーコンにとって species の理論は、天体の地上への影響を合理的に解明するための科学的仮説という性格をもつものであった。そして species の伝播の仕方を研究する上で不可欠な学問、未来の天体の配置を予知する上で不可欠な学問であるということが、数学を重視する最大の理由だったようである。

第5部では、光学そのものが扱われている。眼球の詳細な解剖学的構造が示され、眼球内で光がどのように屈折して視覚が成立するのかが説かれる。さらには屈折や反射を介して何らかの物体を見る場合に、現実の物体と屈折や反射を経てわれわれの眼に映る像との位置関係や大きさの関係が

論じられる。この第5部は、当時ベーコンが西欧における光学の第一人者であったことを示すものであるが、ベーコンは光学の知識の大半を、古代の科学者プトレマイオスとエウクレイデス、そしてとりわけイスラムの科学者アルハゼンから得たようである。

第6部では、経験科学が論じられる。経験科学 (*scientia experimentalis*) とは、他の学問が導き出した結論を、実験・観察によって最終的に確証する学問という意味で、実験・観察を独立の学問として重視したことにベーコンの先見性があったとしばしば評価される。ベーコンは、経験科学の実例として、虹の原理を解明することを試みている。虹と同様な色が現れるさまざまな自然現象を比較し、虹と太陽の位置関係についての観察を踏まえつつ、虹の原理の解明を目指す手法は、近代的な自然科学の方法論を展開して見せた貴重な実例となっている。

Opus Majus の最終章となる第7部は、道徳哲学 (*moralis philosophia*) に充てられている。道徳哲学はすべての知恵の目標であり、他のすべての学問の主人であり、神学にもっとも近く、神学を補佐する学問であるとされる。ところで哲学という語を用いるとき、ベーコンが念頭に置くのはギリシア、ローマ、イスラムの哲学者たちであるわけだが、このことは道徳哲学にも当てはまる。ベーコンが訴えようとした道徳哲学の有用性とは、異教徒の哲学者の道徳哲学がキリスト教世界にいかにより多大な貢献をなしうるかの指摘であった。

三位一体の教義も神が世界と人間を創造したことも、異教徒の哲学者たちは知っていたとベーコンは語る。徳と悪徳についての知恵や、情念の克服に関する知恵の点で、異教徒の哲学者たちがキリスト教徒を凌駕していたとして、その実例を示すべくセネカの著作を長く引用し、異教徒の道徳哲学をキリスト教に不可欠なものとして尊重すべきであることを説く。また世界の主要な宗教を比較し、キリスト教を世界に広めるべき唯一の宗教と結論付け、キリスト教の真理を異教徒に説得するための方法について検討する。

以上が *Opus Majus* の概略であるが、第7部においてベーコンは、哲学の視点に立って世界の諸宗教の比較を試みており、哲学と宗教の関係を直接検討の対象としている。*Opus Majus* は、近代的な学問観を展開した著作ではあっても、キリスト教の発展に貢献すべく教皇に献呈された著作であり、あらゆる学問の最終目標を宗教的なものに置いている著作である。*Opus Majus* における学問観の全体は宗教的なものに支えられており、したがって宗教を直接論じ、しかも哲学と宗教との関連に具体的に論及している第7部は、ベーコンの学問観を解明していく上で、とりわけ重要な要素を含んでいる。*Opus Majus* 第7部に示された宗教と哲学の関係について詳細に検討してみたい。

2

Opus Majus の第2部から第7部までにさまざまな学問の有用性が説かれ、学問ないしは科学を意味する語として *scientia* という語が使われているが、ベーコンは *scientia* という語を今日の英語の *science* に近い意味で使っている。諸々の *scientia* の中でとりわけ尊重されるのが *philosophia* すなわち哲学である。*philosophia* はギリシア、ローマ、イスラムといった異教の哲学を指し、「知恵を愛すること」という *philosophia* の原義に近く、異教徒の間での知的営みを広く意味する語として用いられる。したがって、哲学という語は、ときに異教の諸学問の総称として用いられる³。

異教の学問の総称としての哲学は、神から人類に与えられた知恵 (*sapientia*) を伝えるものと見なされている。ベーコンは、第2部および第7部において、神は一人で、世界は一つで、人類は一つであり、あらゆる知恵は、一人の神から一つの世界一つの人類に与えられたものだという主張を繰り返しており⁴、哲学はまさに人類の共有財産として神から授かった知恵であると考えている。

Opus Majus 第2部では、この考えを説明すべく、神からイスラエルの祖先たちに啓示された知恵が、ギリシアやイスラムの哲学者の手を経て、いかにしてベーコンの時代に伝わったかを示す一種の簡略な哲学史が語られている⁵。これは旧約聖書に登場するイスラエルの祖先たちや預言者たちに与えられた知恵も、ギリシアやローマの哲学者に与えられた知恵も、イスラムの哲学者に与えられた知恵も、同じ一人の神から、同じ人類に与えられたものだということを示そうと意図していることである。

哲学の知恵 (*sapientia philosophiae*) も含めて、すべての知恵が神から人類に与えられたものだとすれば、知恵の目的も世俗的なものではなく、宗教的なものであることになる。したがって、その知恵の伝達と発展に貢献するものとしての哲学をはじめとする諸学問の究極の目的は、宗教的なものにあることになる。第7部においてベーコンは、この目的について語っており、それは救い (*salus*) であるという。また救いを言い換えて、それは来世での幸福 (*felicitas alterius vitae*) であるともいう⁶。

学問とは知恵の探究 (*studium sapientiae*) であって、知恵の目的は救いにあるのであり、救いに直接関わる学問が道徳哲学であるがゆえに、第7部で取り上げた道徳哲学こそ他の諸学問の目的に当たるものだとベーコンは考える。したがって、諸学問は高貴な主人に仕えるように道徳哲学に奉仕すべきであり、道徳哲学は諸学問の成果を集約し活用することをためらうべきではないという。

また道徳哲学と神学の関係については、道徳哲学が哲学に可能な範囲で目的を迫及するのに対し、神学は道徳哲学と同じ目的をキリストへの信仰において (*in fide Christi*) 追求するものであり、道徳哲学は他の諸学問にまして神学に一致しているとされる。しかし、アリストテレス、アヴィケンナ、アヴェロエスといった哲学者を道徳哲学の主たる権威と称していることからわかるように、道徳哲学という語でベーコンが意味するのは、すでに述べたとおり、異教の道徳哲学である。したがって、道徳哲学と神学との一致とは、異教の道徳哲学がキリスト教神学に一致することを意味し、異教の道徳哲学とキリスト教神学が同じものを目指し、同じ目的のために存在していることを意味する。

道徳哲学の扱う内容については、人間を神と隣人と自分自身へと秩序付けることであるとしており、ベーコンは最初に、人間を神へと秩序付けるという点で異教徒の道徳哲学がどれほど大きな成果を上げたかを説こうとする。

異教徒の道徳哲学が、キリスト教の教えに合致する真理を見出したことを示す例として、ベーコンは哲学者たちが三位一体の真理を説いていたという点を指摘する。父と子と聖霊の三位一体についての真理を知っていた哲学者として、プラトン、ポルフェリオス、アリストテレスといった名前があげられている。

そもそも三位一体の真理は人間の理性を超えるものであり、理性よりはむしろ啓示によって得られる真理であるが、神はこのような真理を最初にイスラエルの祖先たちや預言者たちに啓示によって与え、異教の哲学者たちは彼らからこの真理を継承したとあって、ベーコンは第2部で語った啓示の伝承に関する説を繰り返している。

また、異教の哲学者たちは神そのものについての真理を語るのみならず、受肉した神イエス・キリストについての真理も語っているという。受肉した神についての真理なくして人類に救いはないため、この真理は、世界の始めから知られていたものであり、Albumazar⁷が天文学の著作において、乙女が男の子供を産み、その子はイエス・キリストと呼ばれるということを確認したことや、ポルフュリオスが、神の子によってしか罪が取り除かれることはないといったことがその例であるとされる。

また、反キリストの到来、最後の審判、世界の創造、天使等についての真理も哲学者たちの著書に見られるとして、その実例を列挙し、次のようにいう。「哲学者たちの著書に見られる見解で正統な教えと合致するものを、われわれの信仰の証としてわれわれは喜んで受け入れるべきである。なぜならすでに述べたように、彼らやイスラエルの祖先たちや他の諸々の哲学者たちに与えられた啓示を通じて、彼らがその見解を手に入れるに至ったことは明らかだからだ⁸」。イスラエルの祖先たちや預言者たちに啓示された知恵が、異教の哲学者たちに伝承されたという説に加えて、ここでは異教の哲学者たちに神から知恵が啓示されたという見解が語られ、異教の哲学とキリスト教との根本的一致がさらに強調されている。

異教の形而上学はキリスト教と同じく靈魂の不死を唱え、道徳哲学はさらに一步立ち入って、形而上学には探究しえない肉体の復活についての真理をも語っているとし、これを説いた哲学者としてアヴィケンナ、プラトン、ポルフュリオス等の名前をあげている。肉体の復活とは、靈魂が不死であるばかりではなく、不死なる靈魂がいずれ同じ肉体に復帰することを意味するとのことである。

人間が靈魂と肉体の双方から成ることから、哲学者は人間の目的である来世の幸福も、靈魂においてだけ捉えるのではなく、靈魂と肉体の一体化したものとしての人間において捉えているといい、ボエティウスの『哲学の慰め』にもとづき、来世の幸福について次のように説く。「ボエティウスは、『哲学の慰め』第3巻において、最高善すなわち神にあずかることなくして幸福ではありえないということを確認している。なぜなら完全な善である神にあずかることなくして、完全に善にあずかることはないからである。したがって、神の善性を享受することなくして、祝福され、幸福であることはありえない。…神性にあずかることによって、多くの人々が、すなわち万人が祝福された者となる⁹」。神にあずかること (participatio Dei) とは、靈魂のみならず、肉体においても最高善としての神に近づき、神に同化することだと考えられている¹⁰。哲学者たちは神を知り神を愛すること (cognitio et amor Dei) によって神にあずかろうとしたのであり、神にあずかることが知恵であり幸福であると見なしたものと考え、この点でも哲学はキリスト教の教えに一致すると説く。

ベーコンはさらに、哲学者たちが来世での幸福のみならず、悪人におとずれる来世での悲惨さについても真理を語っており、神に従う者には幸福な約束が、神に背く者には恐ろしい約束が待ち受けていることを語っているといい、神に従い、神を敬うための礼拝の必要性とその方法についても哲学者たちが多くの真理を語ったということをつけ加えている。

ベーコンが次に取り上げるのは、人間を隣人へと秩序付けるという道德哲学の側面である。この意味での道德哲学の対象となるのは、人間相互の秩序、すなわち社会的秩序を維持するための法である。ベーコンは、婚姻に関する法、各種の主従関係に関する法、プラトンの国家論に見るような社会の階層間の役割分担に関する法、相続や取引に関する法、国民の平和を乱す有害な行為を取り締まる法、国民が団結して法に敵対する者を倒すための法、立法者の後継者を選出し、適性を欠く立法者を交代させるための法などが道德哲学によって与えられるものとする。西欧の法の起源となるローマの十二表法は、アテネのソロンを翻訳したものであり、それ以外の西欧の法もアリストテレスやその後継者であるテオフラストゥスの本に由来するものであるとして、法の哲学としての道德哲学も、異教徒の間に伝承されつつ培われてきたものであると主張する。

人間を隣人へと秩序付けるという側面に次いで取り上げられるのは、人間を自己自身へと秩序付けるという道德哲学の側面である。この意味での道德哲学は、今日われわれが道德哲学ないしは倫理学といった語を用いるときに一般的に理解しているような意味での道德哲学であり、個人の徳と悪徳に関する学問としての道德哲学である。

「そして（異教の）哲学者たちは、徳と悪徳に関して驚くべきことを語っている。異教徒たちが徳についてのこれほどの崇高さをわきまえているのに、われわれはみじめにも徳の栄光を踏み外していることを見て取ると、すべてのキリスト教徒が戸惑わずにはいられないほどである¹¹」とベーコンは語り、個人の徳と悪徳に関わる異教徒の道德哲学をこのうえなく称揚しつつ、哲学者たちの具体的な説を紹介する。

アリストテレスに対して最大の賛辞を惜しまなかったベーコンだけに、最初に紹介するのはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』における徳論である。靈魂における理性的な部分と情意的な部分との区分に応じて、徳が理性的な部分に関わる知性的徳と情意的な部分に関わる倫理的徳とに分けられること、倫理的徳は不足と過度という二つの悪徳の中間にあたるものであることといったアリストテレス倫理学の基本を解説する。そして十二の倫理的徳と五つの知性的徳のそれぞれに関するアリストテレスの説明を簡略で紹介している。

ベーコンは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』の要点をきわめて要領よくとりまとめて紹介しているが、*Opus Majus* が書かれた頃には、『ニコマコス倫理学』は、容易に入手できる著作ではなかったと思われる¹²。*Opus Majus* において異教の哲学者の説を引用したり紹介したりするにあたっては、入手困難な異教の書物に宿っている貴重な知恵を読者に伝え、人類の共有財産として活用することに貢献しようとする意図があったと思われ、アリストテレスの徳論の解説にも、そのような意図があったと考えられる。

アリストテレスの徳論の紹介に次いで、ベーコンはセネカとキケロをはじめとする古代の哲学者たちが、徳をいかに尊重し、悪徳を蔑み、悪徳を助長するものとしての罪を遠ざけるべきことをいかに強調したかを、豊富な引用によって示そうとする。さらには貪欲、傲慢、贅沢、飽食、怒り、嫉妬、怠惰といった個々の悪徳を解消するために、哲学者たちが語ってきた知恵を具体的に紹介している。徳と悪徳に関する哲学の知恵を説くにあたり、特に頻繁に引用されるのは、セネカとキケ

口であるが、セネカについては、Bridges 編集の *Opus Majus* においておよそ百ページに及ぶきわめて長い引用を行っている¹³。なぜこのような長い引用を行ったのかについて、ベーコンは道徳哲学に関する哲学者たちの見解のすばらしさと生き生きとした言葉に感激したためであるといい、またこれらの書物を子供の頃から探していたが、最近になるまで目にするができなかったため、教皇も手にしていないのではないかと懸念して、詳細な引用をしたのだと語っている¹⁴。

この言葉からすると、ベーコンが引用したセネカの著作は、当時教皇も目にする機会がないほどの希少なものであったのかもしれない。少数の者にしか閲覧の機会のないこれらの著作に隠された哲学の知恵を、人類の宝として伝承する営みにベーコン自身も寄与しようという思いが、*Opus Majus* 第7部の中にセネカの道徳哲学の解説書とでもいべき部分を出現させるに至ったと思われる。実現には至らなかったが、そもそもベーコンは *Scriptum Principale* (主要著作)¹⁵ とみずからが呼ぶ一種の百科全書を計画していたようである。異教の書物を収集し、それらの書物を介して伝えられた哲学の知恵を、みずからの手で集約して百科全書の形にまとめ上げ、後世へと知恵を橋渡しすることに貢献したいという使命感と情熱を抱いていたものと思われ、セネカの著作を長々と引用し紹介せずにはいられなかったのも、知恵の伝承に対するベーコンの情熱の表れではなかったかと思われる。

Opus Majus に引用されているギリシア、ローマ、イスラム等の異教の哲学者の著作は、膨大な数にのぼる。それらの著作の大半は、当時容易に閲覧できるものではなかったはずである。しかもそれらの引用は書名だけではなく第何巻という引用箇所まで示されている場合が多く、ベーコンは *Opus Majus* の執筆に際して、膨大な異教の著作を閲覧できる環境にあったものと想像される。とりわけ第7部におけるセネカからの引用は、一ページ以上にわたる長いものも多く、ベーコンは当時希少だったと思われる数多くのセネカの著作を手元において参照しながら、第7部を書いたものと想像される。若い頃から書物の収集と実験とに巨額の資産を費やしたとベーコン自身が語っているが¹⁶、ベーコンがひもといた書物は、当時としては異例の量であり、接した書物の分野の広さにおいても、おそらく当時他に例を見なかったのではないかと思われる。

4

人間を神へ、隣人へ、自己自身へと秩序付けるという道徳哲学の役割について論じた後、ベーコンは人類全体が信ずべき宗教について探究することを、道徳哲学の最終課題として掲げている。哲学の役割の中でこれほど人類にとって必要で価値あることはないという。なぜなら、「すべての知恵は人類の救いを知ることへと向けられているのであり、この救いは、人を来世の幸福へと導くものを認識することに存する¹⁷」からである。この救いについて探究し、救いへと人々をいざなうことが道徳哲学の最終目的でもあり、他のすべての学問にとっての究極目的でもあると考える。また、すべての人間が救われることを望んでいるのであるから、神は人類に救いへの道を知りうるように計らうはずであり、「神の善性は無限であり、そのため神は、人間が真理の道の認識へと照らされるべく、人間にそのすべを与えている¹⁸」と説いて、真理を認識し、救いに至るために神から与えられた道としての役割を、道徳哲学に認めようとする。

全人類が信じるべき宗教を道徳哲学によって探究することは、具体的には世界の主要な宗教の優劣を比較し、そこから真の宗教を選択することになる。ベーコンが取り上げた世界の主要な宗教とは、Saraceni (イスラム教)、Tartari¹⁹ (タタール人の宗教)、Pagani²⁰ (自然崇拜)、Idololatrae²¹ (仏教)、Judaei (ユダヤ教)、Christiani (キリスト教) の六つである。どの宗教も来世での幸福を求める点に違いはないが、幸福を肉体の悦楽に置く宗教もあれば、靈魂の悦楽に置く宗教もあって、あるものは快樂にあるものは富に執着し、あるものは名誉を、あるものは支配力を、またあるものは名声の栄光を願うとして、ベーコンは各々の宗教が何を目指しているかという点から宗教の比較に着手する。この点からベーコンが各宗教について下した評価は以下のようなものである。

イスラム教徒は、欲するままに妻を増やすことが許されており、この世の善をいかに豊かに享受しようとも、来世での幸福を欠くということに気づかず、現世的な目的を追求する。

タタール人の君主は、天に一人の神がいるように、地上には一人の支配者がいるべきで、その支配者は自分でなければならぬと主張しており、タタール人は支配欲に燃えている。タタール人に関して書かれた書物によると²²、彼らは快樂には無頓着であるが、馬の乳を飲み物とし、不浄な食物を摂取する習慣があり、悪しく不浄な民族である。

自然崇拜は、生活習慣をそのまま宗教の規律として用いており、この世の生のままにあの世の生があるものと考え、この世の悦楽と富と名誉を来世に持ち越そうとする。そのため、死に際しては、宝石、金銀、腕輪、家族、友人などすべての富と財産を自分とともに焼いて、死後もそれらを享受することを期待する。

仏教も同様に、この世の財産をあの世で保持できると信じるが、僧侶たちは貞潔を誓い、贅沢を遠ざけることを喜びとする。しかし精神的なものについては何も知らず、物質的な財産をあの世に期待する。可能な限りこの世の財産を求めることを彼らの法は禁じておらず、それがあの世の生を損なうものとは思わない。

ユダヤ教は、この世の財産と永遠の財産とをともに求めた。精神的に賢い者たちは、律法の力によって肉体の財産のみならず、靈魂の財産をも求めたが、律法を字義通り解する者たちは、来世の財産を単に物質的なものと信じた。

キリスト教は自分たちの法に則って精神的なものを精神的なものとして扱う。この世のものを所有しはするが、それは現世において精神的なものにたずさわり、最終的には肉体的にも精神的にも永遠なものに至るためである。しかし来世においては、現世で用いている外的な事物なしに生きることになるし、動物としての肉体は精神的なものとなって、人間は全体として栄光に満ち、神や天使とともに生きると考える。

各宗教に関するこのような解説にもとづき、ベーコンは宗教の序列を定める。もっとも低位に位置するのは自然崇拜であり、神について無知で、聖職者もなく、誰もが自分の欲するものを神とし、拝みたいものを拝み、好きなように捧げ物をするからだという。これに次ぐのが仏教で、僧侶がいて寺院があり、大きな鐘もあり、これによって勤行や祈りや捧げ物へと信徒を召集するが、多くの神を認め、どの神をも全能とは見なさないという。

第三位に位置するのがタタール人で、唯一の全能の神を崇め礼拝するが、それにもかかわらず火や家の敷居を崇拜し、清めるために何でも火に通し、家の敷居を踏んだ者は誰でも死をもって罰す

る。このような点において彼らは粗野であるという。

第四の宗教はユダヤ教であり、その律法ゆえに神について知っていて、真に救世主を待ち望んでいる。聖人やイスラエルの祖先や預言者のように律法を精神的に理解していた者たちは、それにふさわしい行いをしていたという。

第五の宗教はキリスト教で、キリスト教はユダヤ教の律法を精神的に成就し、キリストの信仰を付け加えることで完成へともたらず宗教であるという。ここではイスラム教への言及はないが、世界の六つの宗教を比較した結論は、当然のことながらベーコン自身が信仰するキリスト教が最高の宗教であるということになる。

ベーコンは次に、最高の宗教としてのキリスト教の真理をどのようにして異教徒に説得し、異教徒を改宗へ導くかという問題について検討する。説得の方法は、奇跡によるかキリスト教徒と異教徒に共通する道によるかのいずれかであるが、奇跡はキリスト教徒をも異教徒をも超えていて予期しえないため、奇跡に頼ることはできないとする。一方キリスト教徒と異教徒に共通する道とは、理性と哲学の道であり、この道はキリスト教徒の力の及ぶところでもあり、キリスト教徒は哲学全体を異教徒から継承したのであるから、異教徒にとって馴染み深いものでもあるとして、異教徒への説得は哲学によるべきであると結論する。

さらにベーコンは、次のように付け加える。「しかしわれわれは、われわれの法や聖人の権威によって異教徒を説得することはできない。なぜなら、異教徒は主イエス・キリストもイエスの法も聖人も否定するからである。そのため別の道に論拠を求めなくてはならない。それはわれわれと異教徒に共通するものすなわち哲学である。この点に関する哲学の力は神の知恵と最大的一致を見ている。それどころか、哲学は神から人間に与えられた神的知恵の痕跡であり、この痕跡を通じて人間が神的真理へと駆り立てられるためのものである²³」。ここでもベーコンは、哲学の究極の起源を神に置き、哲学の知恵はキリスト教の真理と起源を同じくするものであり、キリスト教に貢献するものとして人類に与えられたものだという主張を繰り返している。

哲学によってキリスト教の真理を異教徒に説得する具体的な方法を論じるにあたり、ベーコンは三種類の認識を区別する。認識には三種類あり、一つは経験 (experientia) による認識、もう一つは教え (doctrina) による認識、第三は本性的認識 (cognitio naturalis) と称するものだという。本性的 (naturalis) とは、同じ種に属するものに共通することを意味し、アリストテレスによる靈魂の三分のうち、理性的靈魂 (anima rationalis) には、すべての理性的靈魂に共通する本性的な認識が備わっているとして、真理の説得は本性的認識から出発するのが順当であると主張する。

ベーコンによれば、理性的靈魂の本性的認識とは、神が存在するという認識であり、すべての民族が神について語っていることから、神の存在はすべての理性的靈魂に共通する本性的なものであるとされる。ただし、神の存在の認識はもともと脆弱であるうえ人類の罪によって弱められているため、議論と信仰による手助けが必要だとしている。しかし、神の一性と神がどのようなものであるかということについては、本性的に認識されることはなく、この点に関する諸民族の見解は対立しているため、異教徒への説得にあたっては、幾何学の手法に倣い単純な議論から着手して、段階を踏んで徐々に個別の真理へと進まなければならないという。

ここでベーコンは、議論によってキリスト教の真理を異教徒に説得する方法の実例を示している。

Opus Majus においてベーコンが形而上学²⁴の手法を展開することは稀であるが、説得の実例として示されているのは、形而上学的な神についての証明である。ベーコンはまず神の永遠性に関する次のような証明の例を示す。原因の原因を無限にたどることはできず、原因をさかのぼっていくと、もはや先行原因をもたない第一原因に行き着く。第一原因はみずから先立つ原因を有しないので、何らかの原因によって存在するに至ったわけではなく、非存在から存在に至ったわけでもない。したがって、第一原因は非存在であったことはなく、常に存在した。いまだかつて非存在であったことのないものは、非存在から無限に隔たっており、非存在へと落ちていくことはありえない。それゆえ第一原因は永遠に存在し続ける。

第一原因は永遠であるということから、次に第一原因は無限の力 (*potentia*) をもつことを証明する。永遠なるものが有限の力しかもたないとすれば、その力は不完全であることになり、何かを付け加えることができることになって、変化に従属することになる。ところで、どんな変化にも最初の変化がなくてはならず、すべての変化は最初の変化の後に続く。最初の変化とは存在と非存在に関するものであり、有限な力しかもたないものにはこの変化が起こりうる。しかし、かつて常に存在し、今後も常に存在し続けるものには、存在と非存在に関する変化は起こりえず、この変化に続くいかなる変化も起こらない。したがって、永遠なるものは有限の力しかもたない不完全なものではなく、無限の力をもつ完全なものである。

ベーコンは、このような形而上学的議論により、第一原因が無限の力 (*potentia*) のみならず無限の本質 (*essentia*)、無限の善性 (*bonitas*)、無限の尊厳 (*majestas*)、無限の知恵 (*sapientia*) をもち、無限の力ゆえに世界を創造することができ、無限の善性と無限の知恵をもつがゆえに、最善なる世界を創造せずにはいられず、必然的に世界を創造するに至ったことを証明する。さらに、世界は第一原因のように永遠ではなく、無限の力をもつわけではないこと、神は一人で世界は一つであること、無限の力と無限の尊厳をもつ第一原因に対して、人間は無限の敬虔さ (*reverentia*) をもってその意志するところを為すよう努めなくてはならないことを示し、靈魂は不死であり、神に従う者には無限の幸福が、神に背く者には無限の罰があることを付け加えている。

本性的認識によって神について知りうるのはこの段階までで、神の意志 (*voluntas*) に応えようとして、神の意志について知ろうとするや、自力で知ることは不可能になるという。主要な宗教の間における無数の多様性や対立、同一宗教内での多種多様な宗派間の相違が存在することはその証拠であるとしている。神の意志について知ることは、無限に崇高なことで、あわれな人間は自力でそれを知るには値しないという。人間はそれを探究しようと努める前に、教えを受けて信じるべきであるが、神に関することについては、神自身がいかなる権威をも凌駕する最高の権威であるのだから、神から教えを受けること、すなわち啓示を与えられることによって知るべきであると説く。そして神の善性は無限であるから、救いのために必要なものを神は人類に啓示してくれるという。

どの宗教も自分たちは神から啓示を受けたと信じているのであるが、神は一人で、神の知恵によって治められる人類も一つであり、世界も一つであることから、神の知恵はただ一つであるとする。したがって神について知らなくてはならないことを示してくれる完全な宗教はただ一つしかなく、神からその宗教を受け取る立法者もただ一人であり、啓示はただ一人の完全な立法者に与えられなくてはならないとしている。

その一人の立法者とは誰で、世界に広めるべき一つの宗教とはどの宗教かを見極めるために、ベーコンは再び六つの主要な宗教を比較しており、その内容は最初に行った六つの宗教の比較と重複している。自然崇拜と仏教は、被造物を神と見なし、多くの神を認めるため、真の宗教たりえないという。ここでベーコンは、モンゴルの皇帝モンケハンがキリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒を招集して宗教について論争させたときのことを、修道士 Gulielmus がフランス国王ルイ 9 世に報告するために書いた本²⁵ にもとづいて語っている。この本はベーコンがモンゴル人について論じる際にたびたび引用する本であるが、この本によれば、キリスト教徒とイスラム教徒はただちに仏教徒を論破しており、このことから仏教は真の宗教には該当しないとしている。またタタール人は唯一の神を信じはするものの、偶像崇拜の傾向があって、火や家の敷居を崇拜しており、聖職者もいないためタタール人の宗教も該当する宗教ではないとする。

この三つの宗教を除外して、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教を比較するにあたって、ベーコンはまず哲学者たちの見解がどの宗教の教えと一致するかという点を取り上げる。哲学者たちの見解は、三位一体、イエス・キリスト、乙女マリア、世界の創造、天使、霊魂および最後の審判、永遠の生、肉体の復活、煉獄、地獄の罰などについてのキリスト教の教えと合致するが、ユダヤ教やイスラム教に関してはそうではなく、むしろ哲学者たちはユダヤ教とイスラム教を攻撃しているという。たとえばセネカはユダヤ教を非合理的で迷妄的な宗教として非難し、イスラムの哲学者アヴィケンナは、精神的な悦楽ではなく肉体的な悦楽のみを重視したとってムハンマドを批判しているという。一方キリスト教に関しては、哲学者たちがキリスト教の先触れとして人々をキリスト教へと向かわせる役割を果たしており、この点からすると、キリスト教のみが該当する宗教であると主張する。

次にベーコンは、三つの宗教の立法者モーセ、ムハンマド、イエス・キリストを比較する。ユダヤ教徒はモーセを信仰しているわけではなく、救世主を待ち望んでいるが、イエス・キリストを救世主とは見なさず、救世主はこれから現れるものと考えているという。モーセ以上に完全な立法者を待ち望んでいるのであるから彼らの法が不十分であることは明らかであるし、また救世主がじつはイエス・キリストであることは、彼らが権威と見なすものにより証明できるとして、旧約聖書やユダヤの歴史書からいくつかの証拠を列挙する。

ムハンマドについては、ムハンマド自身がコーランにおいて、乙女マリアが男と交わることなく精霊の息吹によってキリストを生んだといい、キリストは自分より偉大な預言者であるといっていることから、キリストをムハンマド自身に優先していることになり、したがってキリストの法をイスラムの法に優先させるべきであることになるという。

ベーコンはさらに、歴史的な叙述やそれぞれが行ったといわれる奇跡の点から三者を比較し、また三者の法を倫理的観点から比較したりするなどして、完全な立法者はイエス・キリストであり、キリストの法が他の法に優先され、世界に広められるべきであると結論する。

世界の主要な宗教を比較検討し、キリスト教が世界に流布すべき唯一の宗教であることを論じ終えたベーコンは、第 7 部の最後で聖餐の秘跡に言及している。聖餐に関する教えは、キリスト教の内部においても、積極的に受容する者がいる一方で疑念を抱いたり否定したりする者がいるため、異教徒とキリスト教徒とを問わず、聖餐の真理を人々に確固として説得する方法を考察しなければ

ならないという。

ベーコンは聖餐の秘蹟の根拠となる聖書の箇所を示して聖餐の正当性を論じ、すべての聖人も教会のあらゆる権威も共通して支持していることから聖餐の教えは真理であると説く。また、聖餐と洗礼に関して近年見聞された奇蹟の例を取り上げて、秘蹟が真理であることの証拠としており、さらに論理的な手法を用いて、聖餐の正当性に関するいくつかの証明をも試みている。そして聖餐の真理は「現世において、永遠の生の甘美さの中にいるかのように安らかであるために²⁶」他のいかなる真理にもまして進んで受け入れるべき真理であるとして、聖餐の秘蹟を称えている。

聖餐においてはキリストがわれわれに現前し、キリストの無限の善性からわれわれに無限の救いもたらされるとして次のようにいう。「われわれは栄光ある肉によって養われ、栄光ある血を飲む、それどころか、神にして人であるキリストの全体によってわれわれは蘇生するのである。これは死すべきものとしての人間が受容しうる限りでの永遠の生であり無限の救いである。…そして、神とキリストにあずかることでわれわれは神化し、キリスト化し、神になるのであり、『哲学の慰め』第3巻において、哲学の女神が結論しているところでは、神は本性において一ではあるものの、神性に参与することで多くの者が神になるとのことである。したがって、キリストにあずかることによって、われわれはキリストになるのである²⁷」。ベーコンが第7部の最後で聖餐の秘蹟について論じたのは、すべての宗教の目的でもあり、道徳哲学を含めたすべての学問の目的でもあるとされる救いとは何か、について語らずにはいられなかったからであろうと思われる。

世界の主要な宗教の比較、異教徒にキリスト教の真理を説得するための方法、そのいずれを論じるにあたっても強調されるのは、哲学の役割である。宗教を比較するにあたって、特定の宗教の視点からそれ以外の宗教を評価したのでは公平に比較したことにはならない。異教徒にキリスト教の真理を説くにあたって、キリスト教徒の視点から異教徒を説得しようとしたのでは説得力をもちえない。いずれの場合も異教徒とキリスト教徒に共通する普遍的な立場に立たなくてはならないことから、哲学のもつ普遍性が要請されることになる。

哲学ないしは哲学に代表される諸学問の最終目的は救いにあるとされ、救いとは、ここに見るように宗教的な救いを意味している。したがって、目的という点からは、哲学は宗教に従属し貢献するものとして位置づけられる。しかし、普遍性という点からは、哲学と宗教の関係は逆転する。宗教が哲学のもつ普遍性を必要とするということは、逆にいえば宗教に普遍性が欠けているということであり、欠如している普遍性を補うために宗教は哲学に頼らざるを得ないということであろう。ベーコンは人類全体を見据えており、ベーコンにとって真の宗教は、人類全体に普遍的救いをもたらす普遍的宗教である。普遍性をなくして真の宗教たりえず、宗教に普遍性を提供するものが哲学であるとすれば、哲学なくして普遍的宗教はありえず、真の宗教も救いもないことになる。宗教の普遍性を重視すればするほど、哲学の重要性が意識されることになり、哲学は宗教に劣らず人類に必要なものとして神から与えられたという考えに至ったものと想像される。哲学が啓示されたというのは一見すると奇妙な説であるが、哲学に宗教と同等の権威を与えるための説であり、同等の権威を与えずにはいられなくなるほど、哲学の必要性が切実に意識されていたと思われる。そして、その必要性とは、宗教に普遍性をもたらすものとしての必要性だったのではなかろうか。

結

「真の宗教は哲学を超えるものではあっても、哲学に反するものではない、哲学によって批判されるものでもなく、むしろ賛同されるものである²⁸」という言葉に見るように、ベーコンは宗教と哲学を異質のものとは考えない。両者ともに神から人類に与えられたものであると考える。しかもベーコンは、哲学を異教の諸学問の総称として捉えることもあり、哲学を諸学問の代表と捉えることもある。諸学の総称ないしは代表としての哲学が、真の宗教と起源を同じくするということは、すべての学問が根本的に宗教と一致することを意味する。

ベーコンにおいて、哲学をはじめとする諸学問と真の宗教との一致は、由来の一致のみならず、目的の一致でもある。神が人類に哲学と宗教を与えたのは、両者がともに人類にとって必要であるからだとされる。人類が両者を必要としているのは、共通の究極的な目的のためであり、その目的とは救いであると考え。神は無限の善性をもつがゆえに、人類の救いに必要なものを与えずにはいられず、哲学と真の宗教とをともに人類に与えたと考えるのである。

神が救いのために人類に与えたものをベーコンは知恵 (*sapientia*) と呼ぶ。ベーコンによれば、哲学の知恵も宗教の知恵も同じ神から同じ人類に同じ目的のために与えられたものであることになる。神が人類に知恵を与えた方法については、啓示を通じてであると考えられている。哲学の知恵の啓示に関しては、二通りの考えが説かれているように思われる。一つは、旧約聖書に登場するイスラエルの祖先や預言者たちに、神は哲学の知恵を啓示し、その知恵が哲学者たちの手を経て伝承され、ベーコンの時代に至ったという考えである。この説は、*Opus Majus* において何度も繰り返し説かれている。もう一つは、このような啓示と伝承に加えて、古代ギリシアやローマの傑出した哲学者たちに、神は直接に啓示を与えたという考えである。この考えは異教の学問を過大に評価し、異教とキリスト教の差異を不明瞭にするものとして当時のキリスト教社会で譴責を被りかねない考えであるが、すでに指摘したように、*Opus Majus* にはこの考えが読み取れる箇所がある。異教の哲学者たちへの称賛を惜しまず、異教の学問の弁護の書といっても過言ではない *Opus Majus* を著したベーコンが、このような考えを抱くに至ったとしても不思議ではない。

哲学も宗教も神によって人類の救いのために人類に与えられたという主張を根底で支えているのは、人類は一つだという考えであると思われる。神は一人で世界は一つで人類は一つであるという表現をベーコンはしばしば用いるが、人類が一つであれば、宗教や民族の違いにかかわらず、人類の営みの中には人類全体の救いに貢献するようなものが含まれているはずである。また神は人類全体を救おうとするはずで、救いに必要なものを人類全体に与えているはずである。人類全体の救いに必要であるがゆえに、神から人類全体に与えられたものが、哲学をはじめとする諸学問だというように考えたものと思われる。

世界の諸宗教を比較した結論は、ベーコン自身が信仰し、*Opus Majus* を献呈した教皇クレメンス4世が首長を務めるキリスト教こそが、世界に広めるべき唯一の宗教だということになる。しかし、13世紀という時代にキリスト教をも含めて、世界の諸宗教を同じ土俵の上で比較しようとする試み自体が大胆なものであったと思われる。最初から他の宗教を全面的に否定するのではなく、ともかく他の宗教をキリスト教と比較してみようとするのは、他の宗教にも人類の営みの一部である以上、

何らかの意味がありうるという前提にもとづいているのではなからうか。キリスト教が選択されるべき宗教であると結論するにあたってベーコンが用いるのは、キリスト教を優先する (*praeferre*) べきであるという表現である。他宗教を全面否定はしないという姿勢が、この表現にも見られるように思う。そして、この前提を支えているのも、人類は一つであるという考えではなかったかと思われる。人類が一つで、他の宗教も一つの人類の営みの一部であり、他の宗教の信徒も神によって救われるべき人類の一部であるとすれば、一つの人類の価値や尊厳は、異教徒にも及ぶべきものであることになるからである。

人類は一つであるという確信は、人類にとって普遍的なものの尊重へとベーコンを導いたと思われる。真の宗教は、一つの人類の全体に普遍的な救いをもたらす普遍的な宗教であるべきで、その普遍性は、宗教自体によってではなく、哲学によってもたらされると考え、宗教と哲学という両輪が揃うことではじめて、一つの人類の宗教たるにふさわしい真の普遍的宗教が誕生すると考えたのではなからうか。哲学をはじめとする諸々の学問がキリスト教にとって不可欠なものであるということが、*Opus Majus* の一貫した趣旨であるが、キリスト教が普遍的宗教となるのは、哲学を伴うことによってであり、その意味では、哲学も宗教にとって不可欠な構成要素であり、したがって救いにとっても不可欠な要素であることになる。そして、神がその善性ゆえに、救いにとって必要なものをすべて人類に与えたとすれば、宗教のみならず、哲学もまた神から与えられたということになるのであろうと思われる。

ところで、どのような状況がベーコンを普遍性の尊重へと導き、異教の哲学に対するベーコンの独特の敬意や、他の宗教に対する独特の姿勢が生じるに至ったのかは、容易に説明のつかない問題である。*Opus Majus* には、ギリシア、ローマの主だった哲学者の名前の多くが登場し、イスラムの哲学者の名前も十指に余る。しかも、ベーコンはそれらの哲学者の著書を実際に読んでいたものと思われる。ベーコンがこれほど異教徒の学問の研究に傾倒した理由は、ベーコンの置かれた環境が特殊だったことによるとは思えない。すでに述べたように、ベーコンはオックスフォードで教育を受け、パリで教鞭を取り、フランシスコ会の修道士となって、パリとオックスフォードの間を行き来して生涯を過ごしたと考えられている。同時代の同国人バスのアデラルドゥスのように、トレドに滞在してイスラム文化に接したといった特別な経歴があるわけではない。オックスフォードの初代学長と見なされるリンカーンの司教ロバート・グロステストから、アリストテレス研究や光学研究に関して多大な影響を受けたということはあるにせよ、当時のスコラ学を代表する神学者たちと根本的に異なった環境のもとで教育を受けたわけではないようである。

異教徒の哲学や科学に最大限の敬意を払うというベーコンの姿勢は、ベーコンが真理の探究に専心する過程で、13世紀のキリスト教社会の枠の中で培われたものだったかもしれない。異教徒の哲学者の書物を研究するにつけ、彼らも同じ神のもとで真理の探究にたずさわった先導者であり、同志であると感じられるようになり、おのずから彼らに敬意を払わずにはいられなかったと想像される。

13世紀は、シチリア島とイベリア半島のトレドで、アラビア語やギリシア語の文献の大規模な翻訳運動が展開され、西欧の大学ではアヴィケンナの『医学典範』が医学の教科書として使用されていた時代である。キリスト教の内側にとどまっている者にとっても、少なくとも学問的探究を目指

すかぎりにおいては、西欧世界から異教への扉は開かれており、宗教間の壁は厚くなかったのではないかと思われる。キリスト教世界の内側にだけ目を向け、キリスト教の外の世界から目をそらすには、この時代はあまりに開かれた時代だったのかもしれない。普遍性の追求はベーコンにとってそのような時代からの要請であり、時代が課した使命だったとも考えられる。

注

- 1 *Opus Majus* を著しておよそ 10 年後の 1277 年頃には、嫌疑がさらに強まり、ベーコンはフランシスコ会によって投獄されたようである。*Chronica XXIV Generalium Ordinis Minorum* によれば、ベーコンは何らかの疑わしき新奇さ (*aliquae novitates suspectae*) のゆえに罰せられたとのことである。
- 2 ベーコンは、人間の行動が天体によって強く影響されると主張するが、強制されるわけではなく、自由意志 (*arbitrii libertas*) が損なわれることはないという点を強調している。Cf. J. H. Bridges, ed. *The Opus Majus of Roger Bacon*, Oxford, Clarendon Press, 1897, vol.1, pp.251-252, vol.2, p.371.
- 3 *moralis philosophia* (道徳哲学) という語は、ときに *scientia moralis* (道徳学) と言い換えられており、この点からもベーコンが *philosophia* (哲学) という語を *scientia* (学問) とほぼ同等の意味で用いていることがわかる。
- 4 *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 1, p.33, vol. 2, p.386.
- 5 *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 1, pp.44ff.
- 6 ベーコンは「この救い (*salus*) は人間を来世の幸福 (*felicitas alterius vitae*) へと導くものを受け取ることにある」といっている。Cf. *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, p.366.
- 7 Albumazar (787-886 年) はイスラムの著名な天文学者であり、Albumazar の天文学上の著書 *Liber Conjunctionum* (合の書) は、*Opus Majus* において頻繁に引用される文献の一つである。
- 8 *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, p.237.
- 9 *Ibid.*, p.244.
- 10 幸福 (*felicitas*) を論じるにあたって、ベーコンは何度も『哲学の慰め』第 3 巻を引用しつつ、幸福とは神にあずかることであると説く。「したがって、人間の栄光は神の善性にあずかることであり、ここから哲学のもっとも高貴な花冠が生じる。すなわち、『哲学の慰め』第 3 巻にはこう結論されている。神性にあずかることによって人間は神になる。もっとも本性において神は一人ではあるが」(*Ibid.*, p.382) という言葉に見るように、神にあずかるとは、神への同化を意味するものと思われる。このような考えには神秘主義的な傾向も見取れるのであるが、神になるという表現を用いるときベーコンがとりわけ念頭に置いているのは、聖餐の秘跡である。
- 11 *Ibid.*, p.255.
- 12 『ニコマコス倫理学』は、ベーコンの師と見なされるロバート・グロステストによって 1250 年頃にギリシア語から翻訳されている。ベーコンが手に入れた『ニコマコス倫理学』はロバート・グロステストの翻訳によるものであろうと想像される。Cf. R. W. Southern, *Robert Grosseteste: The Growth of an English Mind in Medieval Europe*, Oxford, Clarendon Press, 1986, p.287.

- 13 長く引用されているセネカの著作および書簡は以下のようなものである。*De Ira*（怒りについて）、*De Clementia*（寛容について）、*De Providentia*（摂理について）、*De Constantia Sapientis*（賢者の恒心について）、*Ad Helviam Matrem*（母ヘルウィアへ）、*De Remediis Fortuitorum*（偶然への対処法について）、*Ad Marciam*（マルキアへ）、*De Brevitate Vitae*（人生の短さについて）、*Ad Polybium*（ポリュビウスへ）、*De Vita Beata*（幸福な生について）、*De Otio*（閑暇について）、*De Tranquillitate Animi*（心の平静について）。
- 14 Cf. *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, p.323.
- 15 Cf. J. H. Bridges, *The Life and Work of Roger Bacon*, London, Williams & Norgate, 1914, pp.54ff.
- 16 Cf. J. S. Brewer, ed. *Fr. Rogeri Bacon Opera Quaedam Hactenus Inedita, Opus Tertium*, London, Longman, 1859, p.59.
- 17 *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, p.366.
- 18 *Ibid.*, p.367.
- 19 Tartari という語は本来タタール人を意味するが、ベーコンが念頭に置いているのは、モンゴル人である。*Opus Majus* が書かれた頃、モンゴル帝国は第5代皇帝クビライの治下にあった。モンゴル人に関するベーコンの知識の多くは、第4代のモンケハンの時代にフランシスコ会の修道士ウィリアム・ルブルックが著した見聞録にもとづいている。
- 20 Pagani とは、ヨーロッパ北方のドイツ、ポーランド周辺に暮らしていた民族で、自然物を神として崇拝する民族を指すものと思われる。ベーコンは、Prusцени、Curlandi、Livonii、Estonii、Semigalli、Leucovii といった民族を Pagani であるとしている。Cf. *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 1, p.360.
- 21 Idololatrae とは、偶像崇拝者という意味であるが、仏教徒が人工物である仏像を崇拝するという意味で、ベーコンは仏教徒を Idololatrae と呼んでいる。
- 22 フランス国王ルイ9世に派遣されてカラコルムでモンケハンに謁見したフランシスコ会の修道士ウィリアム・ルブルックの報告書、ローマ教皇によってモンゴル帝国に派遣された修道士ブラノ・カルピニ（ベーコンは修道士 Johannes と呼んでいる）の報告書、および哲学者 Ethicus の著書 *Cosmographia* 等がモンゴル人に関してベーコンの情報源となっている。Cf. *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, p.368.
- 23 *Ibid.*, p.373.
- 24 道徳哲学のみならず形而上学も、神や天使や永遠の命に関する真理を探究することから、形而上学と道徳哲学は多くの共通点を有する学問であるとしており、神が存在すること、神の存在はすべての人間が本性的に認識可能であること、神が無限の権能と善性とをもち、無限の実体と本質とを有すること等は形而上学によって扱われる領域であるという。しかし、神や天使や来世での幸福についての詳細な探究は、形而上学の力の及ぶところではなく、道徳哲学の領域にゆだねられるのであり、この二つの学問は相互の密接な連携のもとに成り立っていると考える。Cf. *Opus Majus*, ed. Bridges, vol. 2, pp.226-228.
- 25 前述のウィリアム・ルブルックの報告書である。ベーコンはウィリアム・ルブルックを修道士 Gulielmus と呼ぶ。

- 26 *Ibid.*, p.400.
- 27 *Ibid.*, p.403. 注10に述べたように、ベーコンは神性にあずかることによって人間が神に同化するという観念を哲学者が抱いていたという証拠として、繰り返しボエティウスの『哲学の慰め』を引用している。
- 28 *Ibid.*, p.392.